



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	英語の冠詞の指導における音形のない冠詞の扱い : John goes to school by bus and plays trumpet in the school band
Author(s)	町田, 佳世子
Citation	教授学の探究, 16, 99-121
Issue Date	1999-03-05
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/13612
Type	departmental bulletin paper
File Information	16_p99-121.pdf



英語の冠詞の指導における音形のない冠詞の扱い

— *John goes to school by bus and plays trumpet in the school band* —

町 田 佳 世 子

(北海道大学大学院教育学研究科博士後期課程)

はじめに

1. 冠詞の指導の先行研究における音形のない冠詞の扱い
2. 音形のない2種類の冠詞 (zero 冠詞と null 冠詞) を認定する冠詞の体系
3. Zero 冠詞と null 冠詞を含む冠詞の体系の指導上の意義

おわりに

はじめに

日本人は冠詞をもたない言語を母語とする。そのため日本人が英語を学習する際、冠詞は最も習得が困難な項目の一つであると言われている。その難しさは、文脈・場面に適切な冠詞の選択にあるとっていいだろう。例えば(1)の場合、いずれの冠詞も文法的には可能であるが、発話の文脈に照らしてどの冠詞を選択すべきかは、日本人学習者の多くが悩むところであろう。

- (1) a. a lack of language skill
b. the lack of language skill
c. lack of language skill

適切な冠詞の選択の問題は、学習がすすんでから現れる高度な文法事項ではない。*The, a*などは中学校1年生の前半で導入され、それ以来 *a* を用いるべきか *the* を用いるべきか、または別の形式を用いるべきかがいつも問題となる。たとえば、中学校の段階で学習する以下のような文においても、(2)、(3)の場合ほどの冠詞を選択するかにより名詞句の意味が異なってくると教えられる。

- (2) a. Susanne went to a university in Germany.
b. Susanne went to university in Germany.
c. Susanne went to the university in Germany.
- (3) a. Karen plays the piano very well.
b. Karen plays piano in a jazz band.
c. Karen played a piano in the music shop and liked it.

しかし、冠詞が異なればいつも名詞句の意味が異なるかといえばそうでもなく、文法書によっ

ては次の場合 *the* をつけてもつけなくてもよいとしている。

- (4) a. She always takes a holiday in the summer.
b. She always takes a holiday in summer.
- (5) a. Kevin is captain of our soccer team.
b. Kevin is the captain of our soccer team.

さらに、固有名詞は冠詞を伴わないが、(6)bの *Rolls Royce*, (7)b, cの *Sally*, *Ms. Sally Dean* は固有名詞であっても冠詞が必要であると教えられる。

- (6) a. John works for Rolls Royce.
b. John bought a Rolls Royce and drove it every day.
- (7) a. Sally is a student of Sydney University.
b. The Sally I know is a student of Sydney University.
c. A Ms. Sally Dean was trying to contact you this morning.

また、同じような意味にも関わらず、冠詞があつたりなかつたりする場合がある。

- (8) a. My sister came to the station by bus.
b. My sister took the bus to the station.
- (9) a. I sent it by mail.
b. I sent it through the mail.

同じ種類の名詞でも、ある名詞は冠詞が必要だが別の名詞は冠詞を伴わない。

- (10) a. I listened to the radio and watched TV.
b. I study at school during the week and study at the library on the weekend.
c. It was snowing in the morning but was clear at night.

このように、どのような場合に *a* か *the*, またはそのどちらでもない形を使うべきかという問題は、英語を話したり書いたりする際に常に学習者の前に突きつけられている。

日本人学習者が冠詞を使用する際の戸惑いや間違いは、基本的には、文法的か文法的ではないかを判断する「言語事実の固い中核部」(Close 1976, クローズ 1980:5)の問題ではなく、「選択領域」(Close 1976, クローズ 1980:5)の問題、すなわち複数の文法的な形式の中から文脈に適切な形式をどのようにして選択するのかの問題である。もし文脈に適切でない形式を選択したならば、意図した意味とは違う意味が聞き手に伝わるためコミュニケーションに滞りがおこる。コミュニケーション能力の形成に貢献する文法教育という観点から冠詞の指導の教育内容

を構成しようとするならば、その教育内容は学習者が状況に適切な冠詞を選択できるようになることを目標としなければならない。

そのためには冠詞の使用を支配する包括的一般的規則が教えられることが必要である。単にどのような場合にどの冠詞を使用するかを羅列的に並べたものであってはならない。また冠詞が関与する様々な言語現象を、例外や慣用的表現ということばでまとめてしまってもいけない。そのような指導では、学習者が新たな場面に遭遇したときに対応できなくなってしまうからである。しかし、従来の教科書のもとに行われてきた冠詞の指導が、このような原則にかなうものであったかという否定的にならざるを得ない。

冠詞の教育内容となる冠詞使用の一般的規則は、学習者が接することになる様々な冠詞の用法を、例外や慣用句としてではなく、可能な限りその規則によって説明するものであると同時に、その規則に基づけば、未知の状況においても根拠を持って適切な冠詞を選択することができるものでなければならない。このような観点から、従来の教育内容や指導の仕方に代わり、冠詞を明示的な規則に支配された体系をなすものとして指導することを目指して、町田(1997)では、主に Chesterman (1991) および Hawkins (1978, 1991) に依拠して、冠詞の指導の教育内容となる新たな冠詞の体系の枠組みを作ることを試みた。本論文では、この冠詞の体系の枠組みが、上に挙げた(2)~(10)までの言語現象をどのように説明し、また従来の冠詞の指導の内容とはどのように異なった扱いが可能なかを検討し、特に音形のない冠詞の扱いに焦点をあててこの枠組みの冠詞指導における意義を明らかにしたい。

1. 冠詞の指導の先行研究における音形のない冠詞の扱い

この節では、従来の教科書や文法書が冠詞の使用に関する規則をどのように記述し指導してきたか、またその結果どのような問題が生じてきたのかを考察していく。

1.1 中学校教科書における冠詞の教育内容

どの中学校教科書でも *a*, *the* などの冠詞は1年生の前半で導入される(小寺他1992:8)。例えば New Crown (1993) では、冠詞は、*I have a picture of my town. This is the picture* のような前方照応の用法から導入され、*the* は「決まったものや、すでに話題になったものにつける」(New Crown 1 教科書 p. 100, 解説編 p. 126) と説明される。その後「前後の関係で、何を指しているかよくわかっているものにつける (*I am a miller. I go to the mill*)」という間接的前方照応が導入され、さらに「習慣的に使っている表現の中で (*in the evening* など)」「*of* ~などによって限定される場合 (*the door of Mrs. Green's house*)」が続く。

しかしここでは *the* の使用を決定する重要な要因である「聞き手」という概念は全く言及されていない。「決まったものや、すでに話題になったもの」が、話し手と聞き手にとって「決まったものや、すでに話題になったもの」であるときにはじめて *the* が使用されるということが強調されなければ、

(1) A : What did you do last night ?

B : I went to the restaurant with my friend.

のように「(自分が友達といったレストランは既に) 決まっているもの」という理由で *the* を用

いるようになってしまう。

また、「of～などによって限定される場合」の例として *the door of Mrs. Green's house* を挙げているが、同じ *of* によって限定されていても *the window of Mrs. Green's house* が不適切であることについては何も述べていない。すなわち、*the* の使用のもう一つの条件、「当該名詞句が指示している対象すべてを包括的に指示する」ことへの言及が全くなされていないのである。

さらに、*in the evening* は習慣的表現として常に *the* を伴うとする一方で、*go to bed, go to school, go to sea, be in hospital* は成句であると述べているが (New Crown 1, 解説編 p. 218), 同じように習慣的に用いられていても、なぜ一方は *the* が生起しもう一方は生起しないのかについての言及もない。

このように *the* が生起する際の条件をいくら羅列してもそれに当てはまらない言語現象がすぐ見つかるのは、それぞれの条件を貫く *the* の使用の根元的な特徴が明らかにされていないからである。学習者は羅列された条件の1つ1つをその都度覚え、さらにその例外を個々に覚えていかなければならない。そしてそのような努力をしても、それに当てはまらない新たな状況におかれたときは、全く対応できないのである。

One World 1 (1994) ではまず *He plays the guitar very well* で初めて *the* が導入される。その説明として、*the* は「ある物事一般について述べる時、可算名詞の単数形につける」となっている。それに続いて、「1日の時の区分を表す名詞につける」として *in the morning* の表現が現れ、さらに「特定のものを指す名詞につける」(One World 1 指導・資料編 p. 137) という原則にすすむ。ここでは、なぜ同じ *the* + 名詞の形式が一方では物事一般について述べ、他方では特定のものを指すのかについての解説はない。しかも *the guitar* について教室での説明は、『『楽器を演奏する』は“play the 楽器”で表す』(One World 1 指導・資料編 p. 138) となり、英語を習ってはじめて *the* が導入されるにもかかわらず、*the* の用法の基本的な要因には全くふれないことになる。「特定のものを指す名詞につける」場合も、「～のとき」のように場合が羅列されるだけで、「特定のもの」とはどういう概念なのかについての説明はない。「話者と聴者の間で共有される脈絡的知識ないしは一般的知識によって特定のものとして固定できる対象を指す機能」という説明は One World 3 の指導・資料編 (p. 20) になって初めて現われる。しかもこの課で *the* が問題となっているのは、*the Tokyo Dome* の表現においてであって、*the* の使用全般をまとめているわけではない。

このようにみていくと、One World 1～3 においても冠詞の使用は羅列的な条件と慣用句で成り立っているという印象を与えてしまいかねない。

1.2 文法書などにおける音形のない冠詞の扱い

英語学習に関しては、多くの文法書や、文法を少しでもわかりやすく解説しようと試みる様々な文献がある。その中で冠詞の使用にふれているものも多い。このセクションでは、そのような文法書や文法解説書が、冠詞の使用の一般的規則をどのように記述し、(1)から(10)までの選択の問題にどう答えているのかを見ていきたい。

ここで取り上げる文法書や文法解説書は、何を冠詞のカテゴリーとして認定しているかという点で2つのタイプにわけることができる。冠詞を *a, the* とし、それらが生起していない場合を無冠詞(いかなる冠詞も生起していない)とする場合(田中 1987, 1991, 葛西 1997, 正保 1996,

小泉 1989, 江川 1991, 安井 1996, Declerck 1991 など) と *a, the* と zero 冠詞の 3 つを認める場合である (Quirk et al. 1985)。

A, the が生起していない場合を無冠詞とする正保 (1996) は, ある名詞句に *a* が生起している場合や冠詞が生起していない場合, その名詞句がどのような意味を表わしているのかを, 豊富な用例を用いて解説しながら, 読者が帰納的に *a* や無冠詞となる一般法則を見つけたしていく方法をとっている (1996:1-38)。しかし読み終わって明らかになる一般法則は, 境界づけられた 1 つのものには *a* が生起するというだけで, 無冠詞になる場合の意味や法則ははっきりしない。境界づけられない材料, 質料, あるものが量的にとらえられた場合無冠詞になるとする一方で, *Some demonstrators were arrested for throwing stones at the police* の *stones* など境界づけられたものも無冠詞であることについては何も述べていない (1996:7)。

このように無冠詞であることの意味や機能をとりにて記述しないのは, 名詞の前に *a, the* などが生起していない場合を無冠詞としたこと自体に原因があると思われる。無冠詞は「冠詞がない」ということなので, ないものの意味を論ずることはできない。そのため *a, the* がどのような意味を表すかはわかっていても, それ以外の場合は *a, the* が表す意味以外のこと, としか規定できなくなるのである。

The の使用については, まず「ある名詞が何を指しているかが相手にわかっていると思うときに使われる」という原則を述べ, 「何を指しているかを示す目印」として, 前方照応, 後方照応, 場面照応の 3 つを挙げている (正保 1996:39-40)。しかし *the* の使用の可否を決定する「包括的な指示」という要因への言及はない。少し長い引用になるが,

(12) (正保 1996:57(49))

For about three centuries after the Norman conquest French was the official language of the country. It was used in *the schools*, in Parliament, in the *law courts*, and by other public bodies. (Italics も原本より)

の *the schools, the law courts* の解説が, 「『学校』『裁判所』と言えは何を指すかが常識的にわかる」(正保 1996:58) ので *the* が使用されるとなっているが, この場合, この国のすべての学校や裁判所という包括的な指示を *the* が行っていることを述べなければ, これらの表現が真に「何を」を指しているのかはわからないだろう。

(6)b, (7)b, c で *a, the* が用いられているのは, 固有名詞が普通名詞化したためであるとし, 固有名詞が普通名詞化するの, 「同じ名前の人が何人もいて区別する必要があるとき, 同じものの違ったいくつかの面を話題にするとき, ある人物の一時的な表情などを表すとき……」などの場合だと述べている (正保 1996:102-5)。しかし, 固有名詞が普通名詞として使用されるという説明の不備は Huddleston (1984:231) により明らかであり, またどのようなとき普通名詞化されるのかというリストも, 正保 (1996) が挙げた場合で言い尽くされているといえるのかどうか定かではない。もしまだ他の場合があるなら, 学習者は新しい現象に出会うたびに追加して覚えていかななくてはならなくなってしまう。

(2)(3)(8)の用法については, *Go to school* や *by bus* などの例を *a* や *the* と生起する場合と比較しながら, 無冠詞の場合「学校の建物や場所ではなく, ……学習の場としての機能」が意識されたり, 「具体的な 1 台」ではなく「(交通手段の)抽象的な選択のレベル」であると述べ(1996:

155-8), また *play the piano* など楽器の名前に *the* がつくのは「ピアノというものを総称的に指している」(1996:166) ためであるとしている!

習慣的表現をただ慣用句としないで, 無冠詞であったり, *the* がついている理由を説明しようとする点で, 教科書での記述より学習者の疑問に答えようとしていると考えられるが, その説明には一貫性がない場合もあり, 読み手を戸惑わせる? さらに *by bus* の *bus* と *That baby has got banana all over her dress* の *banana* はどちらも無冠詞であるが, 「(交通手段の) 抽象的な選択のレベル」と「ぐちゃぐちゃになったバナナのかげら」(正保 1996:7) という意味はどのように関連づけられるのだろうか。これらの問題はやはり無冠詞となることの意味がほとんど問題とされていないことに起因すると考える。

同じように *a, the* が生起しない場合を無冠詞としているが, それを明示的に *a* と対立させているのが田中 (1987, 1995) 及び田中・川出 (1989) である。田中 (1987, 1995) 及び田中・川出 (1989) は, *a* と無冠詞の対立を, 「話者が名詞概念をどうとらえるか」(田中・川出 1989:200) という認知モデルで, またその両者と *the* の対立を, 当該情報を「話者は相手との関係においてどうとらえるか」(田中 1987:362) という談話モデルでとらえる。

田中 (1987) によると, *a* はある名詞概念を単一化という認知処理をした結果の標示であり, 無冠詞は抽象化という認知処理をした結果の標示である。このモデルによると *I like lamb* の *lamb* や *Love is truth* の *love* はそれぞれ LAMB, LOVE という名詞概念から同じ認知処理がなされた結果である。その認知処理を「抽象化」という用語で表すのが適切かどうかは難しいところであるとしても, *a* と無冠詞の対立を明示的に示している点は重要である。ただ田中 (1987, 1995) 及び田中・川出 (1989) においても, 「単一化」の処理をされた *I like apples* の *apples* も, 「抽象化」の処理をされた *I like lamb* の *lamb* もどちらも無冠詞であることについての説明はない。

Go to school や *in prison* の *school, prison* が無冠詞であることは, 話者が SCHOOL, PRISON の名詞概念を抽象化し, 「制度」とみているからであると説明する (田中 1987:366)。また(3)の例については, *play the piano* が *a piano* ではなく *the piano*なのは, どのピアノなのかという問題を押さえ込むため「相手との共有を示す」*the* を使うからであり, *major in piano* が無冠詞なのは「楽器のピアノとして個体化(単一化)することができない」からであるとする (田中 1995:79-80)。さらに *watch TV* はテレビの機械そのものではなく画面を見ているので無冠詞, *listen to the radio* の場合は, 「(音のでる) 機械に耳を傾ける」ため「モノとして処理されている」ので *the* が必要だと述べる (田中 1995:81)。

Go to school の *school* が抽象化という認知処理の結果, 制度となり, 一方で *the school* は単一化の処理をされ, かつ相手も知っている建物を意味するのはいいとしても, *TV* と *the*

1) これより前に, 総称表現として *the* は「個体を指す場合と種類を指す場合」があり「どちらもいくつかの同種の物の中から特定の物を指す働きをしている」と述べているので読み手は「総称的」ということがどういうことかは既に知っている (1996:138)。

2) *Peter is the captain of our soccer team.* の場合は, 「サッカーチームの主将は1人に限定されるから定冠詞がつく」(正保 1996:41) とする一方で, *He's been captain for three years now.* の場合は, 「運動チームの主将はチームにひとりしか決まっているから, ひとりしかいないものを数えることは無意味である。従って不可算名詞として使う」(1996:91) と述べていて, わかりにくい。

radio の違いも同じように「抽象化」「単一化」の認知処理の結果とするのは、かえって「抽象化」「単一化」の概念を曖昧にしまう恐れがあるのではないだろうか。

(6)(7)の固有名詞の用法について、田中(1987)は固有名詞がふつう無冠詞なのは、*Love is truth* の *love, truth* ような抽象概念が、「カテゴリとイグゼンプラの区別がぼけて……区別をする論理的必要性はない」ために「無冠詞が最もふつうの形 (unmarked form)」となるのと同様の理由で、固有名詞の場合も「カテゴリとイグゼンプラの関係は1対1であり、カテゴリ/イグゼンプラの区別を行う必要がない」ためであると述べている (1987:364-5)。そして固有名詞が *a* を伴うのは、「単一化」の認知処理が行われカテゴリの中からイグゼンプラの取り出しが起こっているからで、例えば *a Shakespeare* という場合は、2人以上のシェイクスピアを想定していることになるかと述べている (1987:367)。

固有名詞も普通名詞もその名詞概念を「単一化」するか「抽象化」するかによって伴う冠詞が異なってくるという主張は、固有名詞も普通名詞も冠詞の選択は同じ原理、すなわち「単一化」「抽象化」という認知処理で説明されるという点で大変興味深い。しかし、なぜ「抽象化」という同じ認知処理の結果である同じ形式が、一方は定 (definite) (例えば、*John works for Rolls Royce* の *John, Rolls Royce*) となり他方は不定 (indefinite) (*Love is truth* の *love, truth*) となるのだろうか? 「聞き手の frame of reference」と「新旧情報」(1987:373) に照らし合わせて、(6)a の *Rolls Royce* を、聞き手も知っていて従って旧情報であるから定であり、*love* は聞き手の frame of reference の中に入らないので不定であるとしても、ではなぜ聞き手も知っている場合、*love* の方だけが *the* を伴って *the love* となるのか。このことから、(6)(7)のような例を「抽象化」「単一化」だけで説明することには問題があると考えざるを得ない。

葛西 (1997) では、「本来形があり、数えるものでも冠詞を省くことによって抽象的な意味になってしまう」(1998:2) ことから、*He was elected president* の *president* や *go to church/school/bed* の無冠詞が理解できるのではないかと述べる。すなわち *president* は大統領の資格をいっているし、*church/school/bed* などは「それぞれの名詞が持っている目的・働きなど、…そのものの性質の意味」で使われ、*by bus/train* などの *bus, train* は「運送手段の『タイプ』」を、*have breakfast* は食事のタイプを、*play baseball* は競技のタイプを表しているとする。そしてタイプとトークンという概念を用いて、無冠詞の意味を「タイプとしてみた場合」(1998:4) であると一般化する。この指摘は、タイプとしてみるときは「～ではなくて『～だ』という意味合い」(1998:4) が含まれているという指摘とともに大変重要である。

しかし、問題がないわけではない。例えば、*She is at school* というとき *school* は何のタイプであり、「～ではなくて『～だ』という意味合い」の「～ではなくて」に相当するのは何なのだろうか。*Go to school/in prison* の *school, prison* と *by bus/train* の *bus, train* をどちらもタイプを表すとすれば、前者には、*the* が生起している *go to the school/church* の場合と全く異なる「(学校に) 勉強に行く」「(教会に) 礼拝に行く」という意味が加わるのに対し、後者は、*take the bus/train* の場合と同様、あくまでもバス・列車 (という交通手段) で行くというタイプの読みしかなのはなぜなのだろうか。また、*play the piano* の *the piano* も楽器のタイプと考えられるが、これについては、松本安弘・アイリン (1996:81) を引用してピアノを

3) *John* が定名詞句で *love* が不定名詞句であることの議論は Yotsukura (1970) およびそれを引用して Chesterman (1991:16, 46-7) が行っている。

ひくときはたいてい自分のピアノなので *the* を伴うとしているが、はたしてそうなのだろうか。

これまで見てきた先行研究が、*a, the* が生起する以外を無冠詞としていたのに対して、Quirk et al. (1985) は、冠詞の体系に *a, the, zero* 冠詞、そして場合によって強勢のない *some* を加えている⁴⁾ 従って、*a, the* が生起していない場合を無冠詞とするのではなく、*zero* 冠詞が生起しているとし、その上で *a, the, zero* 冠詞についてそれぞれの機能、用法を取り上げている。*Zero* 冠詞は複数可算名詞と不可算名詞とともに使用され、またカテゴリー的な読みが与えられる (1985:274-5)。さらに、*zero* 冠詞は基本的には不定を表しているが、特別な状況では定の意味で現れるときもあり、その例として *Maureen is (the) captain of the team* の *captain* や散見的な指示 (sporadic reference) のうち慣用的用法の1部として「凍結してしまった (frozen)」*zero* 冠詞の用法、*go to school, in prison, at church, by bus, by mail, in town* などを挙げている (1985:275-9)。しかしここでも同じ *zero* 冠詞が、ある場合は不定の読みを持ち、別の場合には定の読みを持つのかについての説明はない。さらに固有名詞はそもそも冠詞の対立を持たないものであり、(6)(7)のように冠詞の選択の問題が起きるのは、固有名詞が普通名詞として再分類された場合であるとの立場をとる (Quirk et al. 1985:288-9)。

Quirk et al. (1985) の特徴は既に述べたように、冠詞の体系を *a, the, zero* 冠詞、そして強勢のない *some* を含めるとしている点である。言語理論的には、名詞の前に音形をもつ形式がない場合 *zero* 冠詞が生起しているというのは一般的であるが、文法指導上でも何らかの冠詞が生起していると考え意義は大きい。*Zero* 冠詞が生起しているとすれば、あらゆる名詞句の構造を冠詞+名詞という共通の形で扱うことができる。また「冠詞がない」としてしまうと、ないものの意味や機能を論ずることはできず、正保(1996)、田中(1987, 1995)及び田中・川出(1989)を検討したときに指摘したような問題、すなわち個体の集合を指示する *apples* も質料を指示する *lamb* も同じ形式であることや、*John* が定であるのに *apples* は不定であるという、無冠詞の諸特性が説明されないままになってしまう。音形はなくとも何らかの冠詞が生起しているとすれば、その意味や機能を論ずることができ、かつ *a, the* とどの点で相違しどの点で共通しているのかという冠詞相互の関係も明らかにすることが可能になる。

しかし、*zero* 冠詞が生起しているとしても、解決されない問題がある。それらの問題をまとめると、1) *John* と *play piano* の *piano* はどちらもみたところは同じ ϕ +名詞の形式であるが、一方が定 (definite) であり他方が不定 (indefinite) であるのはなぜなのか。2) *go to school, by bus, captain of the soccer team, in summer* などの *school, bus, captain, summer* はそれぞれ定名詞句なのか、不定名詞句なのか、3) 定名詞句であればなぜ *the* をともなっていないのか、4) 楽器や四季や交通手段がなぜ初出にもかかわらず話し手と聞き手がともに知っていることを示す *the* を伴うのか、5) 「抽象的な」「タイプ」「機能」ということばで表されている概念はどのようなことなのか、 ϕ +名詞の形式はいつも「抽象的な」ものを表しているのかということになるだろう。このような問題を、町田 (1997) で提示した冠詞の指導の教育内容としての新たな冠詞の体系がどのように扱うことができるのかを以下で見ていくことにする。そのために、次節では、その冠詞の体系を、土台となった Chesterman (1991) の冠詞の体系の概要と

4) *Some* に関しては積極的に冠詞のカテゴリーに加えているわけではないが、結果として *some* も含んで論じている (Quirk et al. 1985:265, 274-5)。

特徴を明らかにしながら、今一度まとめておく。

2. 音形のない2種類の冠詞 (zero 冠詞と null 冠詞) を認定する冠詞の体系

Chesterman (1991) が提示した冠詞の理論へのアプローチの特徴は大きく3つに分けることができる。

- 1) 冠詞のカテゴリーの構成要素を, *a, the*, 強勢のない *some*, 2種類の音形のない冠詞 (zero 冠詞と null 冠詞と名付ける) としたこと⁵⁾
- 2) それらの冠詞が locatability (問題となる名詞句の指示対象が話し手と聞き手の共有する語用論的集合に位置づけられるのかどうか), inclusiveness (その語用論的集合の中で当該名詞句の指示対象を包括的に指示しているかどうか), limited extensivity (指示が数量的に制限されたものであるか, もしくはカテゴリー・クラスそのものか) という3つの対立軸に対して+, -, ±のいずれかの値をとり, それらの値の組み合わせが個々の冠詞の意味になるとしたこと。
- 3) Locatability, inclusiveness, limited extensivity という概念を集合論の枠組みの中で相互に関連づけたこと。

町田 (1997) では, Chesterman (1991) に依拠し, 新しい冠詞の教育内容の枠組みにおいても冠詞のカテゴリーは, *a, the*, 強勢のない *some*, 2種類の音形のない冠詞から構成されるべきであることを主張した。さらに locatability, inclusiveness, limited extensivity の3つの対立軸に加えて, count の対立軸を導入し, 5つの冠詞は count/mass の対立も標示しているとした。それぞれの対立軸で各冠詞がとる値を, Hawkins (1991) の議論を参考にし, Chesterman (1991:68) を一部修正してまとめたものが以下の表である。

	Locatable	Inclusive	Limited extensivity	Count
zero	-	±	-	±
some	±	±	+	±
a	±	±	+	+
the	+	+	+	±
null	+	+	-	+

(町田 1997:104)

そして冠詞の体系は, locatability, inclusiveness が関与する定性 (definiteness) の次元, limited extensivity が関与する数量的指示かカテゴリー・クラスそのものへの指示かという次元, その名詞句が count の意味解釈を持つのか mass の意味解釈を持つのかという次元の3つの次元から構成されることを提案した。また locatability で問題となる話し手と聞き手が共有

5) それぞれの冠詞の例は以下の通りである。

I read a book/the book/some [sm] books yesterday.

John likes apples and cheese. (名詞句 *John* は null 冠詞+*John* から構成されている。名詞句 *apples, cheese* はそれぞれ zero 冠詞+*apples*, zero 冠詞+*cheese* からなる。)

する語用論的集合がどのようなものであるかについては、基本的に Hawkins(1978, 1991)の枠組みに従っている。

冠詞の指導は最終的にはこれら3つの次元においてそれぞれの冠詞がどのような意味を表し、互いにどのような関係にあるかを学習者が理解し、それによって発話の文脈に適切な冠詞を選択できるようになるだけでなく、他の冠詞がなぜ不適切なのかも説明できるようになることを目指すものでありたいと考えている。

Chesterman (1991) が提案したように、音形のない冠詞を2種類とし、また集合論の枠組みに3つの対立軸を対応させることは、前節でまとめた問題のうち、固有名詞の *John* も *play piano* の *piano* も見かけは同じ形式なのに一方が定で、もう一方が不定なのはなぜかという問題と、(6)(7)で固有名詞が *a, the* と生起する事実を、今までとは異なった仕方でも説明することを可能にする。また *go to school, by bus, captain of the soccer team, in summer* などの *school, bus, captain, summer* はそれぞれ定名詞句なのか、不定名詞句なのか、そして定名詞句であればなぜ *the* をともなっていないのかという問題にも新たなアプローチを提供する。さらには「抽象的な」という用語の意味を、集合の要素への指示と集合そのものへの指示を区別することにより、より具体的に述べるのが可能になる。

そこで、まず新しい冠詞の体系が認定する音形のない冠詞とは何かをまとめ、それが各対立軸でどのような値ととり、また集合論の枠組みの中ではどのような地位を持つのかを見ていくことにする。

Chesterman (1991) は、冠詞が表層に現れていない(音形のない冠詞が生起している)用例には以下の3つがあるとする (1991:45)。

- a. 不定の複数もしくは *mass* の名詞と生起する場合 (*olives, cheese*)
- b. 単数の固有名と生起する場合 (*John, Helsinki*)
- c. 慣用的構造の中の単数可算名詞と生起する場合 (*at church, hand in hand*)

そして a. の場合は zero 冠詞が生起していて、b, c の場合は null 冠詞が生起していると考えられる (1991:45-47)。C. の場合すべて null 冠詞が生起しているかどうかについては、第3節でもう一度ふれることにするが、ここで重要なのは、*John likes cheese* という場合 *John* と *cheese* は異なる構造を持っているということである。

Zero 冠詞と null 冠詞は *locatability, inclusiveness, limited extensivity* について次の値をとる (Chesterman 1991:68)。

	Locatable	Inclusive	Limited extensivity
zero	—	±	—
null	+	+	—

6) Hawkins (1978, 1991) は話し手と聞き手が共有する語用論的集合を、直前までに行われた発話によって形成される集合、発話の直接的な状況によって形成される集合、発話のより広範な状況によって形成される集合、ある引き金となる表現から連想される存在物の集合、同じ名詞句内の修飾語句によって設定される状況や連想の集合の5つに想定した。

Zero 冠詞と null 冠詞は、それを含む名詞句の指示対象が話し手と聞き手が共有する語用論的集合に位置づけられるかどうかという点 (locatability) では対立しているが、どちらも共起する名詞のカテゴリー・クラスそのものを指示することを標示するという点 (-limited extensivity) で共通している。具体的な例で言えば、*John likes cheese* の場合、null 冠詞が生起している名詞句 *John* は、話し手と聞き手が共有する語用論的集合(前方照応、両者の共通の経験などの集合)に位置づけられ(+locatable)、*John* というクラスそのものを指示している(-limited extensivity)。またそのクラスは要素1つからなる集合であるため、結果的にその唯一の要素を包括的に指示していることになる(+inclusive)。一方で *cheese* は話し手と聞き手が共有するいかなる語用論的集合にも位置づけられず(-locatable)、また個別のチーズではなく *cheese* というクラスそのものを指示している(-limited extensivity)。

これを集合論の枠組みに関係づけるとどうなるのだろうか。Chesterman (1991:69 ff) はまず 2 種類の集合を設定する。一つは、名詞句の指示対象 (referent(s)) が位置づけ可能かどうか (locatability) に関与する「存在物の集合 (sets of entities)」, すなわち、聞き手と話し手が共有する語用論的集合である。もう一つは、包括的/排他的 (inclusive/exclusive) の対立が関与する「指示対象 (referent(s))/特性 (property) の集合」⁷⁾ すなわち名詞句の記述を満足する存在物・特性の集合である⁸⁾ もしそのような存在物や特性の総体 (totality) を指示していれば、その指示は包括的 (inclusive) ということになる。この 2 つの集合は、「指示対象の集合」が「存在物の集合」に位置づけられる場合があるという点で、潜在的に包含の関係 (relationship of inclusion) にある (1991:69)。また、集合の要素への指示と集合そのものへの指示を区別し、ある名詞句が集合そのものを指示するということは、その名詞句はその集合の名前として振る舞っていると考える (Chesterman 1991:70-73)。この区別には数量的な指示かカテゴリー的指示かを表す ±limited extensivity が関与する。すなわち、集合の要素を指示する場合は +limited extensivity、集合そのものへの指示は -limited extensivity の値に対応する。

以上のように設定した 2 種類の集合を用いて、Chesterman (1991) は、「5 つの冠詞がそれと共起する名詞の意味にどのように影響するか」(1991:73)、言い換えれば、共起する名詞の指示対象 (denotata) のうちどれを問題とすることになるのかを次のように表している。

a(n)NP : 「指示対象の集合」の 1 つの要素⁹⁾

some NP : 「指示対象の集合」の真部分の要素 (not-all members)

7) 「指示対象/特性の集合」というのは、Chesterman (1991) の冠詞の理論が、指示的名詞句だけでなく、非指示的用法 (Chesterman の場合、叙述名詞句 (predicative NP) を主に非指示的用法と呼んでいる) にも適用されることを目指しているため、指示対象の集合とするだけでは不十分であるとして、特性の集合も含めている。しかし、Chesterman 自身も便宜上「指示対象の集合」と呼ぶことにしているので (Chesterman 1991:69)、本論文でもそれに従いこれ以降は「指示対象の集合」とよぶことにする。

8) 名詞句が指示する「指示対象の集合」と名詞の指示対象 (denotata) を区別することが重要である。「指示対象の集合」は「ある発話の状況における名詞の潜在的な指示対象の総体 (the sum of referents)」であり (Chesterman 1991:69)、「その要素の数は語用論的に限定される」(1991:70)。例えば、*the pen* の「指示対象の集合」はその発話の状況においては、ペン 1 つからなる集合である。

9) 話し手と聞き手が共有する「存在物の集合」に位置づけられないとは言っていないことに注意。Some NP の場合も同様である。

- the NP : 話し手と聞き手が共有する「存在物の集合」に位置づけ可能な「指示対象の集合」の（語用論的に）すべての要素
- null NP : 話し手と聞き手が共有する「存在物の集合」に位置づけ可能な、要素1つからなる「指示対象の集合」そのもの
- zero NP : 「指示対象の集合」そのもの（その集合は要素1つからなる集合であってはならない）¹⁰⁾

(Chesterman 1991:73)

それぞれの冠詞について具体例によって、集合論の枠組みを用いた locatability, inclusiveness, limited extensivity 相互の関係を述べてみたい。

(13) John read a book on women and liked the content very much.

の名詞句 *a book* に生起している名詞 *book* は、その記述を満足する、発話の文脈において潜在的に可能な「指示対象の集合」を形成する。言い換えれば発話の時点で *book* で言い表せるすべての対象物の集合である。そして *a book* の指示対象はその「指示対象の集合」の1つの要素である。(13)の発話が行われた文脈において、話し手と聞き手の間には様々な「存在物の集合」が形成されている!¹¹⁾ しかしこの場合の「指示対象の集合」は話し手と聞き手が共有する集合には位置づかない (-locatable)。また *a book* が指示しているのは「指示対象の集合」そのものではなくその集合の要素であり (+limited extensivity)、またその要素の中の1つ (-inclusive) である!¹²⁾

(13)の *the content* は、名詞 *content* の指示対象の集合の中でも特に、直前の発話の *a book* が引き金となって連想される存在物の集合に位置づけられる「指示対象の集合」の要素である (+locatable)。そしてその「指示対象の集合」の要素すべて（この場合はたまたま要素1つ）を指示している (+inclusive)。また *a book* と同様その「指示対象の集合」の要素を指示しているのであって、集合そのものを指示しているのではない (+limited extensivity)。

Women の場合、*women* によって指示される対象を要素とする「指示対象の集合」は、*a book* と同様、話し手と聞き手が共有する「存在物の集合」に位置づかない (-locatable)。またその集合の要素のどれかを指示しているのではなく、既に述べたように「指示対象の集合」そのものを指示している (-limited extensivity)。

名詞 *John* は固有名詞なので、ある存在物の「名前」を表わしている。名詞句 *John* は名詞 *John*

10) この場合 Chesterman が要素1つとっているのは、分割不可能な単位性を持った要素1つと解釈できると考える。Chesterman (1991:93 ff) では divisibility の概念によって、*a beer* と質料 *some beer*、個体の複数 *some beers* を区別している。

11) 例えば、それまでに話し手と聞き手の間でかわされた会話の中に登場したすべての名詞句の指示対象や、会話が行われている場所にある様々なもの、それらから連想される存在物、話し手と聞き手がもつ一般的知識、社会通念など膨大な大きさの集合である。

12) 冠詞 *a* は locatability に対して±の値をとる (Chesterman 1991:68, Hawkins 1991)。例えば、*I didn't buy the house, because a window was broken* (Hawkins 1991:418) の *a window* は +locatable である。注9も参照のこと。

が固有名詞であることによって、まさに「指示対象の集合」の名前であるといえる（-limited extensivity）。またその「指示対象の集合」は、話し手と聞き手が、以前の発話、発話の場面、もしくは両者の共通の経験などから形成される「存在物の集合」に位置づけられる（+locatable）。さらにこの「指示対象の集合」の要素は、*John* という名前を持つ男性ただ1つであり、従って常にその1つの要素が包括的に指示されていることになる（+inclusive）¹³⁾

このようにして Chesterman は3つの対立軸を集合論の枠組みに対応づけることにより、5つの冠詞の意味を記述する。特に zero 冠詞と null 冠詞を伴う名詞句の指示対象は、「指示対象の集合」そのものであるとする点は大変重要である。また冠詞を指導する上でも、locatability, inclusiveness, limited extensivity など、冠詞の本質に関してはいるものの、概念だけではどのように関連し合っているのかがわかりにくい関係を、集合というひとつの枠組みで示すことができるという点で示唆に富んでいる。

しかし Chesterman (1991) で扱われている例はすべて *olives* のような対象物 (objects) か、*cheese* のような質料 (mass) であり、*justice, safety, love, death* のように概念を表す名詞の場合の「指示対象の集合」の構成要素がどのようなものかについての言及はない。集合論の考え方から言えば、ある概念1つを要素とする集合は理論的には可能である。従って本論文では、「指示対象の集合」の構成要素として、対象物と質料 (mass) だけでなく概念も可能であると仮定することにする。このように仮定すると、*Justice is never done in this country* の *justice* は、zero 冠詞と生起して、*justice* という概念を要素とする集合そのものを指示していると考えられることになる。

Chesterman (1991) の集合論の枠組みを用いた冠詞の意味、特に zero 冠詞と null 冠詞の意味の分析を教育内容に取り入れるとすると、先に挙げた(2)から(10)までの例に対して、どのような説明が可能になるのだろうか。次節でそのいくつかを取り上げ考察したい。

3. Zero 冠詞と null 冠詞を含む冠詞の体系の指導上の意義

3.1 固有名詞の扱い

音形のない冠詞を2種類認定し、*John works for Rolls Royce* の *John, Rolls Royce* は null 冠詞と生起し、*John likes cheese and olives* の *cheese, olives* は zero 冠詞と生起していることにより、みかけは同じ形式なのに一方が定 (definite) であり、もう一方が不定 (indefinite) であるのはなぜかという疑問は消失する。Null 冠詞が生起している名詞句は、話し手と聞き手が共有する語用論的集合にその指示対象の集合が位置づけられ、かつ包括的な指示をしているので定 (definite) の読みが与えられ、zero 冠詞は、話し手と聞き手が共有する語用論的集合に位置づけられない指示対象の集合を指し示しているので不定 (indefinite) の読みが与えられる。

また、固有名詞が null 冠詞と生起しているとすれば、「固有名詞は単独で名詞句を構成する」(Huddleston 1984:231) のではなく、固有名詞も普通名詞も名詞句を形成するとき、冠詞+名詞という同じ構造をもつことになる。従って、「固有名詞は冠詞の対立を欠いている」(Quirk et al. 1985:288) のではなく、むしろ固有名詞にも普通名詞と同様冠詞の対立が存在し、話し手は

13) 話し手と聞き手が共有する「存在物の集合」に *John* という名前の人が2人以上いるかもしれないが、その場合(13)の文は容認されない。(13)が発話の文脈に適切であるためには、「存在物の集合」に位置づけられる *John* の「指示対象の集合」は要素が1つでなければならない。

自分の伝えたい意味内容と発話の場面とに応じて適切な冠詞を選択しているのである。先に挙げた、

- (6) a. John works for Rolls Royce.
b. John bought a Rolls Royce and drove it every day.
- (7) a. Sally is a student of Sydney University .
b. The Sally I know is a student of Sydney University.
c. A Ms. Sally Dean was trying to contact you this morning.

の用例の、(6)b、(7)b、c はどれも特殊なものではなく、また固有名詞が普通名詞として使用されたのでもない。(6)bの *a Rolls Royce* は *a* によって、*Rolls Royce* という名前と呼ばれ得る存在物を要素とする集合の1つの要素を指示することになり、文脈からその存在物は *Rolls Royce* 社製の車と解釈される。(7)c は、話し手と聞き手が共有する「存在物の集合」には *Ms. Sally Dean* という人が存在しないと話し手が想定し、null 冠詞を用いず、*Sally Dean* という名前によって指示される潜在的な指示対象の集合の1つの要素を指示することにした結果である。

固有名詞がその前に音形のある形式を伴っていない場合は、null 冠詞が生起していることこの冠詞の指導上の意義は何であろうか。それは、1.1で取り上げた「～のような人という場合、～という人という場合、～の製品という場合、ある人の様々な側面を言う場合は普通名詞として使われる」というような羅列的な説明が不要になることである。それぞれの冠詞の意味を理解すれば、「～という場合には」のような条件を暗記しなくても、冠詞使用の原理を適用することによって、null 冠詞や *a, the* を選択することができるようになると思う。

3.2 *Go to school, by bus, in summer, play piano, watch TV* の分析

Go to school, by bus, in summer, play piano, watch TV における名詞句 *school, bus, summer, piano, TV* には zero 冠詞が生起しているのだろうか、それとも null 冠詞が生起しているのだろうか。2節で引用したように、Chesterman (1991) は、zero 冠詞と null 冠詞の区別の基準を、複数名詞と mass 名詞 (*olives, cheese* など) と共起するのが zero 冠詞、固有名詞と単数の可算名詞 (*John, at church, hand in hand* の *church, hand* など) と共起するのが null 冠詞としている。しかし Chesterman 自身が認めているように、英語の名詞は基本的には count としても mass としても用いることができる。従って、名詞が count か mass かということ共起する冠詞が zero 冠詞か null 冠詞かを決定することは必ずしも正確ではない。

そこで、それぞれの冠詞の意味素性 (±locatable, ±inclusive, ±limited extensivity) と、使用された名詞句の意味を照らし合わせながら、どちらの冠詞が生起しているのかを考察することにする。この考察に先だって、まずこれらの例と比較してよく問題となる *take the bus, play the piano, in the summer, listen to the radio* などの名詞句 *the bus, the piano, the summer, the radio* がなぜ *the* を伴うのを検討してみたい。

3.2.1 *I listened to the radio/play the piano/took the bus/always take a holiday*

in the summer での *the* の生起について

(14) A : Do you often listen to CDs?

B : Well, I don't have a CD player, so I usually listen to the radio.

(15) I am looking for someone who plays the piano very well.

(16) A : How did you get to the station?

B : I took the bus.

(17) Joanne always takes a holiday in the summer.

の *the radio*, *the piano*, *the bus*, *the summer* はいずれも、前に話題になったり状況的に明らかでなくても *the* が用いられている。これは *the* の例外的な用法なのだろうか。もしこれらの用法が規則に従った使用であれば、その指示対象が位置付けられている話し手と聞き手が共有する語用論的集合があるはずであるが、それはどのようなものなのだろうか。

Quirk et al. (1985) が、*the* は「その典型的な見本によって代表されるクラスを示す」(1985: 282) と述べている。また Close (1976, クローズ 1980) も、*the* の機能の 1 つに「当該種類をいま 1 つのもしくは他のいくつかの種類と区別すること」(クローズ 1980:45) をあげている。*The* がこのように種類を示すことができるのは、当該名詞句によって指示されている種類が、「いくつかの対立する意味カテゴリーとそれらの総合としての上位意味」という「タクソノミー的關係」(織田 1982:217 ff) をもつ集合を形成するからではないかと考える。すなわち、(14) の *the radio* は *the TV*, *the paper* とともにマスメディアという集合や、*the telephone*, *the fax*, *the mail*, *the post* などとともに通信手段という集合を形成し、*the piano* は *the violin*, *the guitar*, *the trumpet* などとともに楽器という集合を形成し、*the bus* は *the train*, *the car*, *the bike* などとともに交通手段の集合を形成する。さらに、*the summer* は *the winter/spring/autumn* とともに四季という集合を形成している¹⁴⁾そしてこれらの集合はいずれも英語の話者にとって十分に限定され、かつだれもが共有しているものである。このような集合に位置づけられ、かつそのような集合の中で包括的な指示を行っているため *the* の使用が可能であり、かつ義務的となると考える。例えば、*take the bus* の *the bus* は、交通機関という十分に定義された集合の中の *bus* という記述を満たす唯一の要素を指示しているのである。

もう一つ重要なことは、このような集合の中で、それぞれの要素が他の要素と区別されているということ、言い換えれば、「～ではなくて『～だ』という意味合い」(葛西 1997:4) をもっていることである。従って、*take the bus, not the train/taxi/subway* の意味が *the bus* には含まれている。

次に、もし(16)の *the bus* がバスという種類(クラスもしくはタイプ)を指示しているのなら、なぜ *I came here by the bus* と言わないのかという問題を考えて見る。この問題を考察するには、名詞句の側からではなく、その名詞句を目的語としている前置詞の側から見てみる必要が

14) 同様の方法で形成される他の種類の集合については、織田 (1982:215-253) が詳細かつ具体的にまとめている。

あるのではないだろうか。なぜなら、例えば(9)(18)のように、どの前置詞と生起するかで *mail*, *telephone* か *the mail*, *the phone* かが決まる例が多く見られるからである。

- (9) a. I sent it by mail.
b. I sent it through the mail.
- (18) a. We talked by telephone.
b. We talked on the phone.

前置詞は目的語となる名詞句に主題役割 (thematic role) を付与する。例えば受動文では *by* は目的語である名詞句に動作主 (agent) という主題役割を付与する。このことを適用して、*I came here by bus* の *by* が何らかの主題役割を *bus* という名詞句に付与しているとすれば、それは道具 (instrument) や動作主ではなく、手段 (means) ということになるだろう。¹⁵⁾ もし *by the bus* とすると *the* によって *bus* の個性性が強調され道具という意味あいが出てしまう。このことをさけるために、*the* が使われないのではないだろうか!¹⁶⁾

では、*the* にかわって *by bus* の *bus* はどのような冠詞が生起しているのか。Zero 冠詞なのかそれとも null 冠詞なのか。どちらの冠詞も、共起する名詞の記述を満足させる対象物の集合そのものを指示しているので、どちらであっても *the bus* が表していたクラス・タイプの読みを持つことはできる。しかし、*I took the bus* や *I sent it through the mail* が *I took the bus, not the train, I sent it through the mail, not through the fax* という、「～ではなくて『～だ』という意味あい」をもっていたのと同様に、*by bus* が *I came here by bus, not by train* という意味あいをもっていることに注目すれば、*by bus, by mail* の *bus, mail* は、交通手段、通信手段という十分に定義され、かつ英語の話者ならだれでも共有する集合に位置付けられていると考えなければならない。この条件を満足させる冠詞は、冠詞の意味素性からいって zero 冠詞ではなく null 冠詞とするのが妥当である。

3.2.2 *Go to school/be at church/be in prison* の分析

She goes to school/is at church/is in prison の *school, church, prison* の場合はどちらの冠詞と生起しているのであろうか。この場合も *by bus* の *bus* と同様ある十分に定義された語用論的集合の中のクラス・タイプを表しているのだろうか。

Quirk et al. (1985) をはじめ多くの文法書が *church, school* などを *institutions of human life and society* の一つとみなしているし、ネイティブスピーカーの言語直感でも同様であろう。¹⁷⁾ そうすると、*church, school* などは英語の話者ならだれもが共有している十分に定義されたそのような公共機関の集合の構成要素であるといえるかもしれない。

15) *By* が名詞句に付与する主題役割は、この他にも、経験者役割 (experiencer: *Elmer was seen by everyone who entered*), 主題物役割 (theme: *The intersection was approached by five cars at once*), 目標役割 (goal/recipient: *The porcupine crate was received by Elmer's firm*) などがあるが (Baker 1988:335) この場合はそのいずれでもない。*By bus* は「どのように？」という問いへの答えとして用いられている。

16) 織田 (1982) は、道具は +individual, 手段は -individual であると述べている (1982:48)。

ところが、この場合の名詞句 *school, church, prison* などは、*by bus* の *bus* の場合と意味的に大きな違いがある。まず、*She goes to school/is at church/is in prison* の *school, church, prison* などは、公共機関のそれぞれのクラス・タイプというよりも、そこでの活動に焦点がある。*Go to school* であれば、学校に行って勉強する、*be at church* であれば教会でお祈りをしている、*be in prison* なら服役中というように、その施設と結びついている行為が含意され、かつその含意は取り消すことのできない言語規約的含意 (conventional implicature) である (Stvan 1993)。

さらに *by bus* の場合は、*by the bus* と言い換えてもやはりバスというクラスそのものを指示しているが (Quirk et al. 1985:700), *go to the school/church* とするとクラス指示はなくなり、ある特定の学校・教会の建物そのものを指示することになるという点で異なっている。もし *school, church, court, prison* などが英語の話者ならだれでも共有する十分に定義された集合を形成しているとするれば、その中の要素は *the+N* の形式によっても指示されてよいはずなのにそうはならない。また *by bus* が *not by train* を含意できるのに対し、*go to school* は *I go to school, not to church* を必ずしも含意しない。このように様々な点で *by bus* の *bus* と *go to school* の *school* は異なっている。

この違いはどうして生じるのだろうか。そこで、両方の名詞句内に生起している冠詞は異なっているという仮説をたててみる。Chesterman (1991) とは異なり、本論文では *by bus, by mail* の *bus, mail* は null 冠詞が生起しているのに対し、*go to school/be at church* の *school/church* には zero 冠詞が生起していると考えるのである。Zero 冠詞を含む名詞句は、名詞が表す概念 1 つを要素とする集合そのものを指示し、その集合は、話し手と聞き手の共有する語用論的集合には位置づけられない。このように仮定すれば、*go to the school/church* のように *the* と生起すると個別の建物を指示してしまうのも、*go to school, but not prison* という意味あいがないのも、すべて *bus* や *train* が形成していたような、「典型的な見本によって代表されるクラス」 (Quirk et al. 1985:282) を要素とする集合を形成していないからであり、また *school, church* が一般的な概念として用いられているために、「勉強する」「お祈りをする」「刑に服す」という行為の含意が派生できると考えることができる。

ではこのように *by bus, go to school* を分析することの指導上の意義は何だろうか。1 節でも見たように、従来は *by bus, go to school* の *bus, school* には冠詞は生起していないか、生起しているとしても同じ冠詞が生起していると考えられていた。しかしそれらの形式は意味的に多様であるため、形式と意味を 1 対 1 に対応させることができず、*go to school/be at church/be in prison* の *school, church, prison* は「名詞が持っている働き・目的……の意味で使われている」(葛西 1997)、「抽象化された」(田中 1987)、「機能焦点化」で「付帯する行為に比重が置かれている」(西川 1998) と解説し、一方で *by bus, by mail* の *bus, mail* はバスや郵便というクラス・タイプを表していると言明しなければならなかった。同じ形式が、一方で機能や目的を表し、一方ではクラスを表すという言い方は、同一の形式にあまりにも違った意味を持たせることになり、学習者に大きな負担となるだけでなく、理論としても洗練されていない。しか

17) 例えば *institutions* ということばを聞いて具体的にどんなもの思い浮かべるのかと問えば、*church, school, hospital, university* などがあがる一方で、*library, theater, swimming pool* などは含まれないという回答が得られるだろう。

し、それぞれの名詞句は、zero 冠詞+名詞と null 冠詞+名詞のように異なる構造を持ち、それぞれ別の意味が与えられているとすればそのような問題は解決する。

3.2.3 *In summer, play piano* の分析

ここでは、*in summer, play piano* の *summer, piano* がどちらの冠詞と生起しているのかを考察する。(4)の例は全く意味が同じなのだろうか、それとも違いがあるのだろうか。

- (4) a. She always takes a holiday in the summer.
b. She always takes a holiday in summer.

3.2.1 で述べたように *the summer* における *the* の使用は、四季という十分に定義づけられた、英語の話者に共通する集合を形成する要素であることから説明される。ではなぜ *in summer* とも言うのだろうか。*In the summer* と *in summer* の場合は前置詞が同じなので、*the* が生起しないことを、*by bus* を検討したときのように前置詞からの制約と考えることはできない。そこで、*take the bus* や *by bus* がもつ *not by train, not by subway* の意味あいがあるが *in the summer, in summer* にはあるのかどうかに着目してみることにする。そうすると、*she takes a holiday in the summer* では、*not in the winter/spring/autumn* の含意がある一方で、*She takes a holiday in summer* の場合、そのような含意はないか、あっても程度が低いことがわかる。このことは、*in summer* の *summer* は単に *summer* という概念の集合を指示しているだけで、何らかの十分に限定された共有集合の要素を指示しているのではないことを意味している。従ってそのような指示を持つ名詞句は zero 冠詞と生起していると考えなければならない。このことから *in the summer* と *in summer* は、どのような含意をもたせるかを話者が選択できるよう英語が用意している 2 通りの形式と考えることができる。

同様にして(3)の *play the piano* と *play piano* の違いも分析することが可能である。

- (3) a. Karen plays the piano very well.
b. Karen plays piano in a jazz band.

(3)a の *the piano* は *not the violin, not the trumpet* の意味あいを持つ楽器のタイプとしてのピアノである。一方で(3)b ではそのような意味あいはない。従って null 冠詞とではなく、zero 冠詞と生起しているとするのが妥当である。Zero 冠詞と生起しているとすれば、その指示対象は *piano* という概念 1 つからなる集合そのものである¹⁸⁾。そのためピアノのパートという解釈が可能になる。

3.3 *Kevin is captain of our soccer team* の分析

次のような名詞句の用法は中学校 1 年生の早い時期に導入される¹⁹⁾

18) *Pianos* と複数形になっていないことに注意しなければならない。*Pianos* であれば、個体としてのピアノすべてを要素とする集合そのものを指示することになる。

(19) I am a student.

そして(20) a は間違いであることも、また(20) b は自己紹介の時などには使えないことも教えらるる。

(20) a. *I am student.

b. I am the student.

このことから類推すれば、

(5) a. Kevin is captain of our soccer team.

は、*a captain of our soccer team としなければ非文法的となるはずだが、そうはならない。さらに、

(5) b. Kevin is the captain of our soccer team.

でもよいと教えられる。冠詞の意味や機能を理解できるように指導されていないならば、学習者は不必要に混乱してしまうにちがいない。

Quirk et al. (1985:276) も Declerck (1991:334) も、補部である名詞句が、ある一時期に一人の人しか就くことのない役割や職務を表している場合は、(5) a, b がどちらも可能であるとしている。(5) b が文法的であり、また *a captain of our soccer team が非文法的であるのは、of our soccer team によって語用論的に限定された集合の中で名詞 captain が指示できる対象(この場合は社会通念上1つしかない)を包括的に指示していることによる。しかし(5) a も文法的ならば、なぜ同じことを表すのに2つの形式が必要なのだろうか。

それを考察するためにまず(5) b の the captain of our soccer team がどのような機能を果たしているのかを考えてみたい。Lyons (1977) は(5) b のような構造をもつ文は2通りに解釈されると述べている(1977:185)。ひとつは、the captain of our soccer team が叙述的機能(predicative function)、すなわち主語名詞句の特性、役割、特徴などについて述べるという機能をもつものとして使用されている。もうひとつは the captain of our soccer team が指示表現(referring expression)として、今言及しているものが何かを示すために使用されている(Lyons 1977:178)とするものである。後者の場合、この文の2つの名詞句(Kevin, the captain of our soccer team) はどちらも指示表現となり、is という copula によって、両者は同一のものであると断定されている。指示表現であれば、それぞれの名詞句は入れ替え可能であり、

(21) The captain of our soccer team is Kevin.

19) One World (1994) では、1年生の lesson 3 で導入されている。

と言い換えることができるし、定冠詞の使用も義務づけられている。叙述的機能として使用されている場合は、2つの名詞句は入れ替え不可能であり、また、叙述名詞句の定冠詞の使用は随意的である (Lyons 1977:185)。

これらのことから、*the* を伴う(5)b *the captain of our soccer team* は指示的表現か叙述的機能かという点で文法的に曖昧と考えられる (Lyons 1977:472)。

では、(5)a の *captain of our soccer team* は指示的機能をもつのか、叙述的な機能をもつのか、それとも(5)b と同様曖昧なのだろうか。もし指示的機能を持っているのなら(2)のように「入れ替え可能なはずである。ところが、

(2) *Captain of our soccer team is Kevin.

は非文法的と判断される。従って *captain of our soccer team* は *the captain of our soccer team* とは違って2通りに曖昧ではなく、叙述的機能、すなわち Kevin の役割について述べているという1通りの解釈しかない。ここに(5)a の形式が存在する理由があると考えられる。

(5)b の *the captain* が指示的名詞句であるとする、その指示対象は、話し手・聞き手が共有する語用論的集合の中にすでに存在する対象か、発話の時点でその集合に導入された対象のどちらかになる。しかし後者の場合は、*I didn't know that your soccer team had a captain.* のように「定」として記述することを拒否される可能性がある (Chesterman 1991:20-21)。そうすると聞き手に Kevin についての情報を与えるという目標を達成できないおそれがある。そのような不確実性を抱える(5)b よりも、Kevin の役割について述べるだけの機能しかない(5)a を選択した方がコミュニケーション上むだがないこともある。(5)a, b は、聞き手がどのような知識を持っているのかを話し手がどう想定するかという語用論的な要因によってどちらかが選択可能なように用意された2つの形式と考えることができるのではないだろうか。

最後に *captain of our soccer team* の *captain* がどちらの音形のない冠詞と生起しているのかということについては、of our soccer team という修飾語によって限定された集合の中に位置付き、かつ *captain* という役割をそのものを指示していることから null 冠詞が生起しているとするのが妥当であろう。

おわりに

日本人学習者にとって冠詞の習得はむずかしいといわれるのは、そのような概念が日本語にないということもあるが、同時に従来の文法教育での冠詞の扱い方にも原因があったのではないかと考える。冠詞を *a* と *the* だけに限定し、どちらも生起していない場合は無冠詞として意味や機能を正しく指導してこなかった。しかし、無冠詞とされてきた形式も他の冠詞と同様、様々な意味を標示しているのである。

本論文では、まず従来の文法指導の問題点を、主に名詞の前に音形がない場合の扱い方を中心に検討した。そこで明らかになったのは、名詞の前に音形がない場合をすべて同じ形式とみなす不備であった。そのため様々な用例に一貫した説明を与えることができず、結果的に用例ごとに意味を羅列するにとどまる場合が多かった。

次に、町田 (1997) で提案した冠詞の教育内容の枠組みが依拠している Chesterman (1991) の理論の特徴について、主に音形のない冠詞を2種類認定すること及び集合論的アプローチの

内容を紹介し、その指導上の意義を考察した。最後に Chesterman (1991) に依拠した冠詞の教育内容の枠組みが、(2)から(10)に挙げたような冠詞の選択の問題をどのように扱うことができるのかを検討した。その内容を今一度まとめると、固有名詞は null 冠詞と生起し、普通名詞と同様常に冠詞＋名詞の構造を持っている。固有名詞が *a Sally, the Sally* のように他の冠詞と生起するのは、普通名詞が *a, the* と共起する場合と同じ一般規則に従った結果である。*Play the piano, took the bus, in the summer, in the morning, listen to the radio* などの名詞句に *the* が生起するのは、英語の話者が共有する十分に定義された集合の中の要素を包括的に指示しているからであり、意味的には、その典型的見本によって代表されたクラス・タイプを表わしている。*By bus, by mail, at night* のような場合は、前置詞 *by, at* の側からの制約で、同じようにタイプの読みがあり共有集合への位置づけを示す null 冠詞が *the* の代わりに生起する。*In prison, at school, in summer, play piano* の場合は zero 冠詞が生起していて、それぞれの名詞が表す「一般的な概念」そのものを指し示していると考えられる。*Captain of our soccer team* の *captain* は話し手と聞き手の共有する *our soccer team* という集合に位置づけられるので、ここで生起している音形のない冠詞は null 冠詞である。*In the summer/in summer* や *the captain/captain of our soccer team* のようにどちらでもよいと言われてきた用法も、どのような意味あいを含めるかとか曖昧性をさけるという目的のために存在する異なった形式であることにも言及した。

3.2 では述べなかったが、*watch TV* は *watch the TV* も可能であり (Quirk et al. 1985: 269), 何らかの理由で *the* が音形のない冠詞に置き換えられたと考えるのではなく、時代の変遷に伴うことばの変化など他の理由で *watch TV* となった、冠詞の一般規則の例外と考えるべきであろう。

様々な習慣的用法とされてきた名詞句を、単に「学校という機能、ピアノのパート、機械というよりも画面、バスというタイプ」などのようにあまりにも異なったことばで解説してきた従来の指導とは異なり、zero 冠詞と null 冠詞を区別することにより、話し手と聞き手が共有する十分に限定された集合に位置づけられるクラス・タイプそのものを指示する場合 (*by bus, by mail, captain of our soccer team, John*) と、そのような集合には位置づけられない一般的な概念からなる集合そのものを指示する場合 (*go to school, in prison, in summer, play piano*) を区別することが可能になった。そのことにより指導上では、前者は「～ではなく——だ」という意味あいがあるクラス・タイプを指し示し、また後者は一般的な概念を指示しているため、文脈に応じて機能や目的などを表したり、楽器そのものではなくそのパートや科目を表すことができるというように、それぞれの名詞句が表す意味をはっきりと分けて説明することが可能になる。また *I like apples and cheese* の *apples, cheese* が前者は離散的個体を指示し、後者が連続体を指示しているにもかかわらず同じ zero 冠詞を伴っていることについても、それぞれが *apples* からなる集合そのもの、*cheese* からなる集合そのものを指示するという点で共通しているからであると述べることができる。これらのことから、音形のない冠詞を 2 種類認定する冠詞の体系を教育内容としていくことの意義が認められると考える。

しかし未だ検討を要する点も多くある。例えば、*by bus* の *bus* が、*the* ではなく null 冠詞と生起するのは、前置詞 *by* の制約のためであるとし、その制約の要因を *by* による意味役割の付与に求めたが、その考察はまだ憶測の域を出ない。またそのような制約を課すのは *by* だけではなく *at* も考察の対象にしなければならないが、本論文では *at* に付いては全くふれていない。

Chesterman (1991) の理論にも問題がないわけではない。Zero 冠詞及び null 冠詞を含む名詞の指示が「指示対象の集合」そのものである (-limited extensivity) とするならば、Chesterman の枠組み通りに \pm inclusive の値を問題にする必要はたしてあるのだろうか。Chesterman は zero 冠詞は \pm inclusive の値をとり、null 冠詞は $+$ inclusive の値をとっているが、inclusiveness の対立は集合の要素への指示が問題になっているときに限定されるのではないかという疑問が残る。この問題は zero 冠詞を伴う総称表現の問題につながっていくのかもしれない。この点も今後検討していきたいと考える。

このような問題も含めて理論的な考察を深めながら、英語学習者が初めて出会う状況でも依頼できる冠詞の使用の一般規則を確立し、それを教育内容とする実践的な研究につなげていく過程の中に本論文は位置づいている。

参 考 文 献

- Baker, M. C. 1988. *Incorporation: A Theory of grammatical function changing*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Chesterman, A. 1991. *On definiteness: A study with special reference to English and Finnish*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Close, R. A. 1976. *English as a foreign language*. 斎藤俊雄訳『クロス 現代英語文法』(研究社出版, 1980)
- Declerck, R. 1991. *A Comprehensive Descriptive Grammar of English*. Tokyo: Kaitakusha. 安井稔訳『現代英文法総論』(開拓社 1994).
- 江川泰一郎. 1991. 『英文法解説』金子書房
- Huddleston, R. 1984. *Introduction to the grammar of English*. Cambridge: Cambridge University Press
- Hawkins, J. A. 1978. *Definiteness and Indefiniteness: A study in reference and grammaticality prediction*. London: Croom Helm.
- Hawkins, J. A. 1991. On (in)definite articles: implicatures and (un)grammaticality prediction. *Journal of Linguistics*, Vol. 27, pp. 405-442.
- 葛西清蔵. 1997. 『英語学演義』共同文化社
- 小泉賢吉郎. 1989. 『英語のなかの複数と冠詞 —日本人は本当に英語を理解しているか—』ジャパントイムズ
- 小寺茂明, 森永正治, 太田垣正義. 1992. 『英語教育叢書 6 英語教師の文法指導研究』三省堂
- Lyons, J. 1977. *Semantics*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 町田佳世子. 1997. 「英語の冠詞の教育内容構成の課題—英語教育における名詞句の構造と機能の指導の体系化を目指して—」『教授学の探究』第 14 号, 北海道大学教育学部教育方法学研究室, 73-106 頁
- 松本安弘・アイリン. 1996. 『英語の名教授』丸善ライブラリー
- 西川栄紀. 1998. 「言語・文化・教育 —冠詞のコミュニカティブ教育文法—」『21 世紀の民族と国家第 8 巻 ポーグレース時代の外国語教育』pp. 109-164. 未来社
- 織田 稔. 1982. 『存在の様態と確認 —英語冠詞の研究—』風間書房
- Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech and J. Svartvik. 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman.
- 正保富三. 1996. 『英語の冠詞がわかる本』研究社出版
- Stvan, L. S. 1993. Activity implicatures and possessor implicatures: What are locations when there is no article? *CLS29/1*, pp. 419-33.
- 田中茂範編. 1987. 『基本動詞の意味論』三友社出版
- 田中茂範. 1995. 『見て学ぶやさしい英語④「動詞」から始める英文法』アルク
- 田中茂範, 川出才紀. 1989. 『動詞がわかれば英語がわかる —基本動詞の意味の世界—』ジャパントイムズ

安井 稔. 1996. 『改訂版 英文法総覧』開拓社

Yotsukura, S. 1970. *The articles in English : A Structural analysis of usage*. The Hague : Mouton.

教 科 書

【New Crown 1～3】1993. (検定年1992) 森住 衛他. 三省堂

【One World 1～3】1994. (検定年1992) 佐々木輝雄他. 教育出版